

複合的資源管理型漁業促進対策事業調査

(日本海海域フォローアップ調査分)

ヒラメ

(抄録)

小向 貴志

はじめに

第Ⅰ期の資源管理対象魚種であるヒラメの資源管理実施後における漁獲動向を把握した。

方法と材料

1960年から2001年までのヒラメ漁獲動向把握は、県統計（海面漁業に関する調査結果書）を用いて市町村別に調べた。また、本県日本海沿海8漁業協同組合（小泊、下前、鰺ヶ沢、大戸瀬、風合瀬、深浦、鱸作、岩崎村）の1993年1月から2001年12月までのヒラメ漁獲量および金額ならびに月別、漁法別、銘柄別漁獲動向を調査した。さらに、各漁協で銘柄規格が統一されていないため、大戸瀬漁協の銘柄を標準規格とし、他漁協の銘柄別漁獲データを微調整して取りまとめた。また、ヒラメの着底稚魚を対象とした桁網による分布密度調査を行った。

結果

・漁獲統計調査

本県日本海海域における2001年のヒラメ漁獲量は142トンで、2000年の88%であった。漁協別に漁獲量の増減についてみると、鰺ヶ沢および大戸瀬漁協が前年比で79～84%に減少したが、その他の漁協は平年並みか、やや増加傾向で推移した。次に、月別漁獲量についてみると、盛漁期にあたる6月の落ち込みが大きかったことが影響し、前年比の46%で推移した。また、銘柄別漁獲重量についてみると、1997年から2000年までは、銘柄「大」以上の漁獲割合が33～38%で推移していたが、2001年は、銘柄「小」および「少々」の漁獲割合が増加したことにより、その漁獲割合が28%に低下し、小型化する傾向がみられた。一方、2001年の漁獲金額も、約2億3,800万円と、1993年以降では2番目に低い金額で推移した。また、銘柄別の単価についてみると、1993年から2000年までは年々、低下する傾向がみられたものの、2001年は、銘柄「小」を除く全ての銘柄で、上昇傾向がみられ、鮮魚ヒラメでは、全ての銘柄で上昇傾向がみられた。

・ヒラメ稚魚分布密度調査

ヒラメの着底稚魚を対象とした分布密度調査は、8月6日、8月26日、10月16日の3回行った。桁網による曳網試験の結果、採集されたヒラメ着底稚魚の全長範囲は22～148mmと、全て当歳魚と推定された。この3回にわたる曳網調査中における分布密度のピークは、8月6日で、52.7尾/1000m²（漁獲効率1）であった。

発表誌：平成13年度複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書、平成14年3月、青森県

複合的資源管理型漁業促進対策事業調査

(日本海海域フォローアップ調査分)

マコガレイ

(抄録)

小向 貴志

はじめに

第Ⅰ期の資源管理対象魚種であるマコガレイの資源管理実施後における漁獲動向を把握した。

方法と材料

マコガレイの漁獲動向把握は、本県日本海沿海8漁業協同組合（小泊、下前、鰺ヶ沢、大戸瀬、風合瀬、深浦、鱸作、岩崎村）から水揚げ資料を収集し、取りまとめた。なお、大戸瀬漁協および風合瀬漁協については、0.2kg以下の銘柄「小カレイ」に含まれるものについては、集計数値に合算しなかった。また、1998年から小泊漁協分については、マガレイとマコガレイを区別して集計した。

結果

2001年におけるマコガレイの漁獲量は約43トンと、2000年の約35トンを上回った。しかしながら、50～70トン台で推移していた1993年から1998年と比べると、まだ低い水準で推移した。

漁協別の漁獲量についてみると、鰺ヶ沢漁業と大戸瀬漁協の二つの漁協で、全体の約半分を占めている。次に、月別漁獲量では、3月に漁獲のピークがみられた。また、漁業種類別漁獲量についてみると、1998年以降、全体に占める沖合底曳網漁業の漁獲割合が低下する一方で、定置網による漁獲割合が年々、増加し、2001年には全体の76%を占めた。

鰺ヶ沢漁協所属の沖合底曳網漁業における銘柄別漁獲量では、「大」の割合が引き続き高く、2001年は全体の約51%を占めた。しかし、1993年から2000年までは銘柄「大」の占める割合が60～80%程度で推移していたことからすると、2001年は小型化している傾向が窺われた。

漁獲金額については、2001年は約3億7千万円と、2000年の約3億1千万円に比べて増加している。しかし、1993年の約10億5千万円に比べれば、年々、減少傾向にある。これを鰺ヶ沢漁協所属の沖合底曳網漁船における銘柄別単価をみると、銘柄「中」の単価が最も高く、1,301円/kgであったが、2001年の銘柄別単価は2000年と比較して、いずれの銘柄においても低下していた。

複合的資源管理型漁業促進対策事業調査

(日本海海域フォローアップ調査分)

マガレイ

(抄録)

小向 貴志

はじめに

第Ⅰ期の資源管理対象魚種であるマガレイの資源管理実施後における漁獲動向を把握した。

方法と材料

マガレイの漁獲動向調査は、本県日本海沿海 8 漁業協同組合（小泊、下前、鰯ヶ沢、大戸瀬、風合瀬、深浦、鱈作、岩崎村）から水揚げ資料を収集し、取りまとめた。

資料中の大戸瀬と風合瀬漁協については、銘柄「小カレイ（0.2kg 以下）」を全てマガレイとした。さらに、小泊漁協の資料については、1998 年以降、マコガレイとマガレイを区別した。

2001 年 1 月から 7 月まで、および 12 月に大戸瀬漁協から検体を購入し、魚体測定を行って「小カレイ」の組成を調査した。

結果

マガレイは、漁獲動向調査を開始した 1993 年以降にあつては、年々、漁獲量が減少する傾向にあり、2001 年は約 36 トンと、これまでの最低漁獲量を記録した。（ピーク時の 35%に相当。）

漁協別の漁獲量についてみると、鰯ヶ沢漁協と大戸瀬漁協の二つの漁協で漁獲量全体の半分以上を占めている。次に、月別漁獲量についてみると、1993 年および 1994 年は 9 月に漁獲のピークがみられたが、1995 年以降は 1～2 月にピークがみられている。また、漁業種類別の漁獲量では、1995 年以降、漁獲量全体に占める沖合底曳網漁業の漁獲割合が低下する一方で、定置網による漁獲割合が増加する傾向を示し、2001 年には全体の 65%を占めた。

鰯ヶ沢漁協所属の沖合底曳網漁船の銘柄別漁獲量についてみると、1998 年以降、「大」の占める割合が大きくなる傾向を示し、2001 年には全体の 58%を占めていた。

一方、漁獲金額については、1993 年以降減少傾向にあり、2001 年には約 4 億円と、1993 年以降では最低の漁獲金額を記録した。次に、鰯ヶ沢漁協所属の沖合底曳網漁船による銘柄別単価をみると、銘柄「大」の単価が最も高く、2001 年には 1,752 円/kg と、2000 年の 1,740 円/kg より若干上昇したものの、そのほかの銘柄にあつては、低下した。

複合的資源管理型漁業促進対策事業調査

(日本海海域フォローアップ調査分)

ムシガレイ

(抄録)

小向 貴志

はじめに

第Ⅰ期の資源管理対象魚種であるムシガレイの資源管理実施後における漁獲動向を把握した。

方法と材料

ムシガレイの漁獲動向把握は、本県日本海沿海 8 漁業協同組合（小泊、下前、鰯ヶ沢、大戸瀬、風合瀬、深浦、鱈作、岩崎村）の水揚げ資料を用いて行った。また、魚体測定用の検体として、大戸瀬漁協からムシガレイを購入し、雌雄別に全長組成を調べた。（＊大戸瀬漁協では、銘柄区分がない。）

結果

ムシガレイの漁獲量は、1993 年以降、3～18 トンの水準で推移していた。2001 年は、約 17 トンと 1993 年以降では、高水準の漁獲量であった。しかし、昭和 53～63 年における年間の漁獲量は、2～135 トンの範囲にあり、平均 63 トンで推移していたことからすると、現在の漁獲水準は回復基調にあるものの、過去の漁獲データから長期的にみれば、まだまだ低水準である。また、昭和 62～64 年にかけては 2～9 トンと、極端に低い資源水準であったことを考慮すると、ムシガレイは、資源量変動の大きい魚種であることが推察される。

漁協別の漁獲量についてみると、1993 年以降、鰯ヶ沢と大戸瀬両漁協で全体の 69～81%を占めている。（盛漁期は、3～5 月。）次に、漁業種類別漁獲量についてみると、定置網による漁獲が最も多く、1993 年以降では、漁獲割合が全体の 42～61%を占めている。平均単価は、1993 年以降では最低を記録した 2000 年の 938 円/kg から若干上昇し、1,027 円/kg となった。

深浦漁協における銘柄別漁獲量について見ると、1997 年に魚体が小型化する傾向が窺われたが、それ以降大型化する傾向に転じ、それとともに漁獲量も増加、2001 年には銘柄「大」の全体に占める割合が 6 割以上を占めた。次に、大戸瀬漁協に水揚げされたムシガレイの全長組成調査の結果から、ムシガレイの漁獲量は周期的に発生する卓越年級群によって左右されていると推察された。

参考のため、1994 年から 2001 年における盛漁期（3～5 月）の魚体測定結果を記載した。

複合的資源管理型漁業促進対策事業調査

(日本海海域フォローアップ調査分)

マダイ

(抄録)

小向 貴志

はじめに

第Ⅰ期の資源管理対象魚種であるマダイの資源管理実施後における漁獲動向を把握した。

方法と材料

1960年から2001年までのマダイ（一部、チダイを含む。）の漁獲動向調査は、県統計（海面漁業に関する調査結果書）を用いて、市町村別に調べた。なお、1997年からは魚種、銘柄別漁獲データを日本海沿岸8漁業協同組合（小泊、下前、鰯ヶ沢、大戸瀬、風合瀬、深浦、鱈作、岩崎村）から入手し、漁獲量および金額を、月別、漁法別、銘柄別に調べた。（マダイとチダイの区分は、魚体測定および銘柄別漁獲量調査の結果、体重0.4kg以上の全ての個体がマダイであることが解り、精度向上。）

結果

本県の日本海海域におけるマダイの漁獲量は、1988年以降、上昇傾向にあり、2001年は212トンと、2000年の178トンに比べて、19%増加した。この値は、1966年以降では、最も多い漁獲量となった。

漁協別の漁獲量についてみると、2001年は、岩崎村漁協による水揚げ増加が目立った。また、大戸瀬漁協および岩崎村漁協の二つの漁協で本県の日本海海域全体の53%を占めている。

盛漁期は、例年同様5月から6月と12月にピークがみられ、1997年から2001年まではこの3ヶ月で年間漁獲量の71～78%を占めている。漁業種類別漁獲量では、定置網による漁獲がその大部分を占め、1997年から2001年までは82～90%が当該漁業による漁獲量で占められている。次に、大戸瀬漁協における銘柄別漁獲量についてみると、年々、大型化傾向にあり、銘柄「P」以下の小型魚は1992年には全体の8割以上を占めていたのに対し、2001年には50%以下になっている。

漁獲金額は、2001年は約1億8千万円で、前年比34%増であった。

大戸瀬漁協の銘柄別単価は、年々、低下傾向にあったが、2001年は銘柄「半1-5入」、「込み」を除く、全ての銘柄で単価の上昇傾向がみられた。

複合的資源管理型漁業促進対策事業調査

ハタハタ（日本海）

（抄録）

伊藤欣吾

目 的

ハタハタの漁獲動向をモニタリングする。

漁獲量調査

青森県日本海沿岸 8 漁協（脇元、十三、車力、赤石水産、大間越の 5 漁協を除く）におけるハタハタの漁獲量と金額を月別漁法別銘柄別に調べた。青森県日本海海域におけるハタハタの漁獲量は 1965～1975 年には 500～1,800 トンで推移していたが、1978 年以降減少し、年間 20 トン以下に低迷し続けていた。ところが、1998 年に年間 37 トンに増加し、翌年は 15 トンに減少したものの、2000 年は大きく増加し 73 トン、2001 年は前年並みの 70 トンであった。

全長組成調査

鯺ヶ沢漁協の沖合底曳網、深浦漁協の沖合底曳網、および岩崎村漁協の刺網を対象に、銘柄別の全長組成を調べた。全銘柄の全長範囲は 150～280mm であった。岩崎村漁協の銘柄「子抜き」は全て排卵・排精後の個体であり、その他の銘柄は全て成熟移行期の個体もしくは成熟個体であった。

分布調査

2002 年 5 月 8 日～10 日に青森県日本海海域において、試験船青鵬丸のオッタートロール調査で採集されたハタハタの全長組成を調べた。水深 70～200m の海域において、ハタハタ未成体（1+歳）の生息が確認された。